

「テレビがつまらなくなつた」と言われる理由。

テレビがつまらなくなつた。「テレビ離れ」という言葉と共に、よく耳にする漠然としたコメントである。実際、テレビ番組一つ一つを見てみると、どれも「よくできている」番組ではある。決して番組の制作クオリティが下がっているわけとは思えない。しかし言い方をえれば、どれも「同じようによくできている」番組であるともいえる。もし、本当に「テレビがつまらなくなつていて」とすれば、原因はどこにあるのか。作る側の問題なのか、見る側の問題なのか。『ダウンタウンDX』等の人気番組を見てかけるプロデューサー西田二郎さんに、お話をうかがつてみました。

聞き手・文／横江史義

今月のGな人

よみうりテレビ プロデューサー
テレビ演出家

西田 二郎さん

にしだ・じろう/1989年読売テレビ放送株式会社(以下、よみうりテレビ)入社。「11PM」「EXテレビ」を経て1998年制作会社「ワизビジョン」に出向。あまたの放送局と番組を制作。2002年よみうりテレビに戻り、東京制作局チーフ・プロデューサーとして「ダウンタウンDX」を演出するほか、最近希薄になりつつある人とのつながりをテーマにソーシャルな展開で関西で話題の「ガリガル」を演出。



「西田さんからみて、いまのテレビ番組はどのように見えますか。」

「西田さんは、そうではない番組作りを心がけているわけですか？」

「西田さんは、まだ一つ言えることは、若手に即効性ばかり求めるよ

うな業界にはしたくないです。若

い奴が、突拍子もない企画を考えた

とします。そこに大人たちが、「こう

い数字がとれる」といつてハサ

ミをばさばさ入れて、結局、元の企

業のエッセンスはどこにも残っていない

ものになる。そして、いざオンエア

したらコケた……そんなことは

ショットちゅうあります。同じコケる

なら、若手に自由にやらせてコケた

方が余程よいわけで。「待つ」ことを

しなくなつた時代は、若い才能を潰

すやつてみよう」という企画の方が

思つてやつてみるだけではなく、「な

んかよくわからないけど、とりあえず

言つてみよう」という企画の方があ

ります。たとえば、当番組で「芸能人ス

ターの私服」という企画があります

が、あの企画を私が最初出したとき

に、会議室で全員きょとーん!

したから。ダウンタウンも「なんでこ

んなことやるの?俺たち服とか興味

ないし…」という感じで。でも、やつ

てみたらかつてないほどの数字がと

れました。

番組制作者は、「自分の信じているもの、これを世の中に届けたい」という強い思いを表現したい」といつも思っています。しかし、実際オンエアされている番組を見ると、そういう作り手の魂や創造性に満ちている番組とそうでない番組があるのは事実。そして、前者の番組ほど数字がとれているかとなると、必ずしもそうではなく、むしろそうでない番組が数字をとっているケースが多いのも現実です。ひと昔前の状況からは大きく変わった点ですね。昔は、作り手が込めた魂やクリエイティブティは、そのまま数字にもはね返ることが多かったのですが、今はそろそろ数字をとつてみると、「なぜそのように変わってしまったのでしょうか? 作る側の価値観と見る側の価値観が乖離してしまったということでしょうか?」

そういうことではないと思います。

昔も今も、おもしろいものはおもしろいし、つまらないものはつまらないわけで。ただ、おもしろいかおもしろくないを見きわめる「期間」が極めて短くなつたということです。ひと言で言えば、「待つ」ことをしなくなつたんです、世の中全体が、番組でもタレントでもそうですが、昔は、その番組やタレントがおもしろいかどうか、今すぐはわからないけど、「なんかよくわからないけど、おもしろい雰囲気あるから、ちょっと様子見てみようか…」という猶予期間みたいなものがありました。「予感を楽しんで待つ」みたいな感覚が。その感覚が、今の時代ものすごく希薄になりましたよね。今は、視聴者もスポーツ



「最初から完成や成功を目指さない番組のほうが、視聴者の心を動かすわけですね。」

「西田さんが今、局の垣根を超えて、同世代のクリエイターと「未来のテレビ」を語りたいと考えていらっしゃるのも、そういう背景があるわけですね。」

私はそう思います。むしろ未完成で「穴を視聴者の埋めてもらう」くらいの感覚の方が結果として視聴者はついてくる。しかし、先ほども申し上げましたように「即効性」を求められるわけですね。

私はそう思います。むしろ未完成でしますよ……」

※続きは「Gプレス2012 Summer Session」で